

地域活性化という「遊び」⑥

京都市
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

「分からないことの楽しさ」をもっと知って欲しい

やかましいほどの蝉せみの声
夜はカエルの大合唱
子供達が待ちに待った夏休み
始まりました。

最近の子供達忙しいですね。
こんな田舎でも
ほとんどの子供が塾に通っているし
夏休みというのに宿題がたくさん。
その他休み中にも学校で
勉強会みたいなのもあったりして
ひと昔前のように
夏休み~~~~~っ！
遊ぶぞ~~~~~っ！
て感じがしません。
まあ時代が変わってしまった
といえませんが
時代が変わっても

生きるという本質は変わらないので
今のようないびつな教育に何かしらの
疑問を感じているのは
僕だけではないはず。

確信があったわけではないのですが
その疑問の答えがなんとなく
田舎や農業にあるような気がして
越してきたのが7年前。
子供達の通知表は
ほとんど見ないので
学校の勉強ができていのかどうかは
よく知りませんが
自然に囲まれた場所を気に入って
少々不便でも
楽しそうに生活しているのを見ると
生きる力はあるのか
という気はします。



畑の草取り体験。抜きやすいのやら抜きにくいのやらいろいろ感じて考えて

僕が思う生きる力ってというのは
危機管理能力とでも言いましょうか
例えて言う
「危ないっ!!」と
転びそうになったときに
うまくバランスを取ったり
たとえ転んだとしても
ぱっと手をついたり
受け身を取ったりするような能力の



雑草は種類によってはヤギの餌に。みんな草を噛む音にビックリ

ことです。
こういう能力は
畑のでこぼこ道や
田んぼの細い畦を歩いたり
石がゴロゴロの山道や河原を
歩いたりして
時間をかけて自然と
身につけるしか方法はありません。
転びそうになったときは

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを運営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

夏休みに入っすぐ
 地元の小学生がお手伝い体験という
 ことで農場にきてくれましたが
 前日雨が降ったにもかかわらず
 みんなきれいな運動靴で登場。
 「あれっ、長靴は?」と聞くと



草取りが蜘蛛探しへ脱線。しかし子供の興味を優先します

さっと手を出しましてよ
 というようなことを
 繰り返し本で読んでいても
 実践することは
 不可能だと思います。
 予想外の危機に陥って

「本にはそんなこと書いてなかったよ」というのもよく聞く台詞です。

「プリントには書いてなかった」らしい。
 うーん真面目というか素直というか
 軍手や水筒
 書いてあるものはちゃんと忘れずに
 持ってきてくれるんですけどね。
 僕だったら
 どんなときに何が必要かを考える
 ところから体験を始めると思います。
 生徒に「何がいますか?」と
 聞かれたら
 逆に「畑するとき何がいると思いま
 すか?」と答えます。

■

我が家の場合
 魚釣りに行くときなど
 持ち物の用意は子供に全て任せ
 出発前に親が持ち物の
 点検をすることもしません。
 なので、三男が竿を忘れ
 て釣りができなかった
 ときもありました。
 そういう経験をさせて
 自分で考える、確かめる、
 という
 能力を身につけてもらう
 のです。
 偉そうなことを言う僕も
 こちらに来るまでは
 ダメでした。
 集落の草刈りやPTAの
 草刈りなどに呼ばれて



蜘蛛の糸をひっぱると果てしなく出てくることに感動

草刈り機だけ持って行ってしまっ
 恥ずかしい思いをしたものです。
 もちろん運動靴で。
 地元のみなさんは草刈り機他に
 レーキやフォーク、竹箒、
 足元はスパイク地下足袋、
 そして80歳くらいのおじいちゃんに
 なる
 鎌から鉋や鋸、藁からロープまで
 「困ったな」ってときに
 必要なものが軽トラックから
 ヒョイツと出てきて
 あっという間に問題解決。
 移住したての僕には、まるで
 ドラえもん4次元ポケット。
 「草刈りします」という情報だけで
 これだけの準備ができる
 ということにとっても驚きました。

■



ときどき蛇がいるような川ですが、危ない危ないでは遊ぶところなくなっちゃいます

それ以来
 みわダツシユ村の農業体験でも
 こちらから与える情報は
 最小限にして
 いかに子供達に
 感じて考えてもらうか
 ということに重きを置いています。
 収穫体験等エンターテイメント的に
 農作業という行為を
 楽しむのも大切ですが
 それを入り口として
 感じたり考えたり教科書にはない
 予想外の発見をしたりと
 「わからないことの楽しさ」を
 もっともって知って欲しい。
 だから僕は子供達に
 「なんで?」と聞かれても
 いつも「なんでやと思う?」
 と答えるのです。